

慶雲館

町に尽くした豪商が建てた明治の迎賓館



初春、盆梅展の会場として賑わう慶雲館だがあとの期間は何に使われているのか知っている人は少ないだろう。石灯籠やお相撲さんの像のある庭はつつそうと茂った樹木におおわれている。時間が止まったような不思議な空間を今号のテーマに取り上げてみた。

慶雲館学事始め

教科書にない明治を 慶雲館に学ぶ

「慶雲館」と言えば、湖北の歴史に造詣が深いみーなの読者なら、旧長浜駅舎鉄道資料館の向かい側に建っていて、明治の豪商が私財を出して建てたこと、明治天皇の行幸に間に合わせるために突貫工事で行ったこと、それくらいはスラスラと出てくるだろう。

でも、重要文化財でもないし、まして市の指定文化財でもない。毎年、初春恒例の盆梅展会場になっているが、あとの期間は何に使われているのか、あまりわからない。館内に入ってみると、巨大な石灯籠があったり、お相撲さんの石像があったりして、オヤツと思ったりするが、樹木がつつそうと茂っていて、広い庭が十分手入れされているようでもない。湖北の人たちにとっては、時間が止まったような、ちょっと不思議な空間なのだ。

慶雲館が建てられた、明治という時代を考えてみよう。わたしたちのまわりを探せば、まだ一人や二人くらいは明治生まれの人が生きています。でも、明治維新や文明

開化といった言葉は、教科書のなかの出来事だ。わたしたちにとって、明治という時代は、遠いようで近いようで、微妙な位置にある。いまなら、かろうじて明治生まれの人から話が聞ける。昭和一桁生まれ以前の人なら、お祖父さんやお祖母さんから「明治天皇さんが慶雲館へ来やあつたときに、みんなで出迎えたんや」といった話を聞いた人もいるかもしれない。いま、わたしたちが生きている二十世紀末は、人の口から明治という時代を語ってもらえる最後のチャンスなのだ。

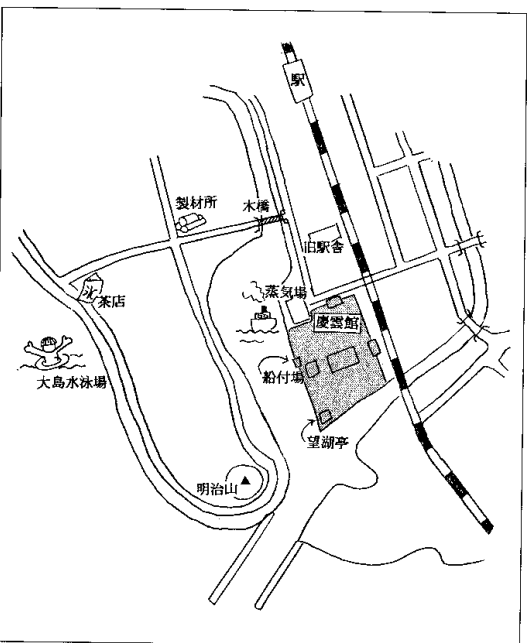
そこで、教科書に出てこない明治を、長浜の商人の生き方や庶民の暮らしのなかから探ってみようというのが、慶雲館をテーマにした第一の理由である。

市民の文化度は 慶雲館でわかる

第二の理由は、慶雲館が建てられた経過のなかにある。浅見又蔵という長浜の商人が、私財を投げうって、私邸ではなく明治天皇の行在所という迎賓館を建てたこと、いまの世の中ではとても考えられないことだ。いまは企業メセ

ナとか、フィランソロピーなどというカッコいい言葉が流行っているが、大企業だって、不景気のなかで一地方都市の公共施設にお金を出すようなことはしない。当時の長浜町では、小学校や銀行、鉄道などの公共施設も、町民がお金を出し合ってつくっている。わたしたちが、慶雲館を建てた当時の長浜の人たちが学ぶことは多い。

第三の理由は、慶雲館を訪れてみればわかる。とにかく庭が荒れている。合理性や経済性という物





建物の壁には格子状の窓があり、外の景色が見える。

玄関前には青銅製の灯籠があったが、雨風に腐りかかっていた銅製の刀籠（写真）として、戦争の際、押出させられたという。

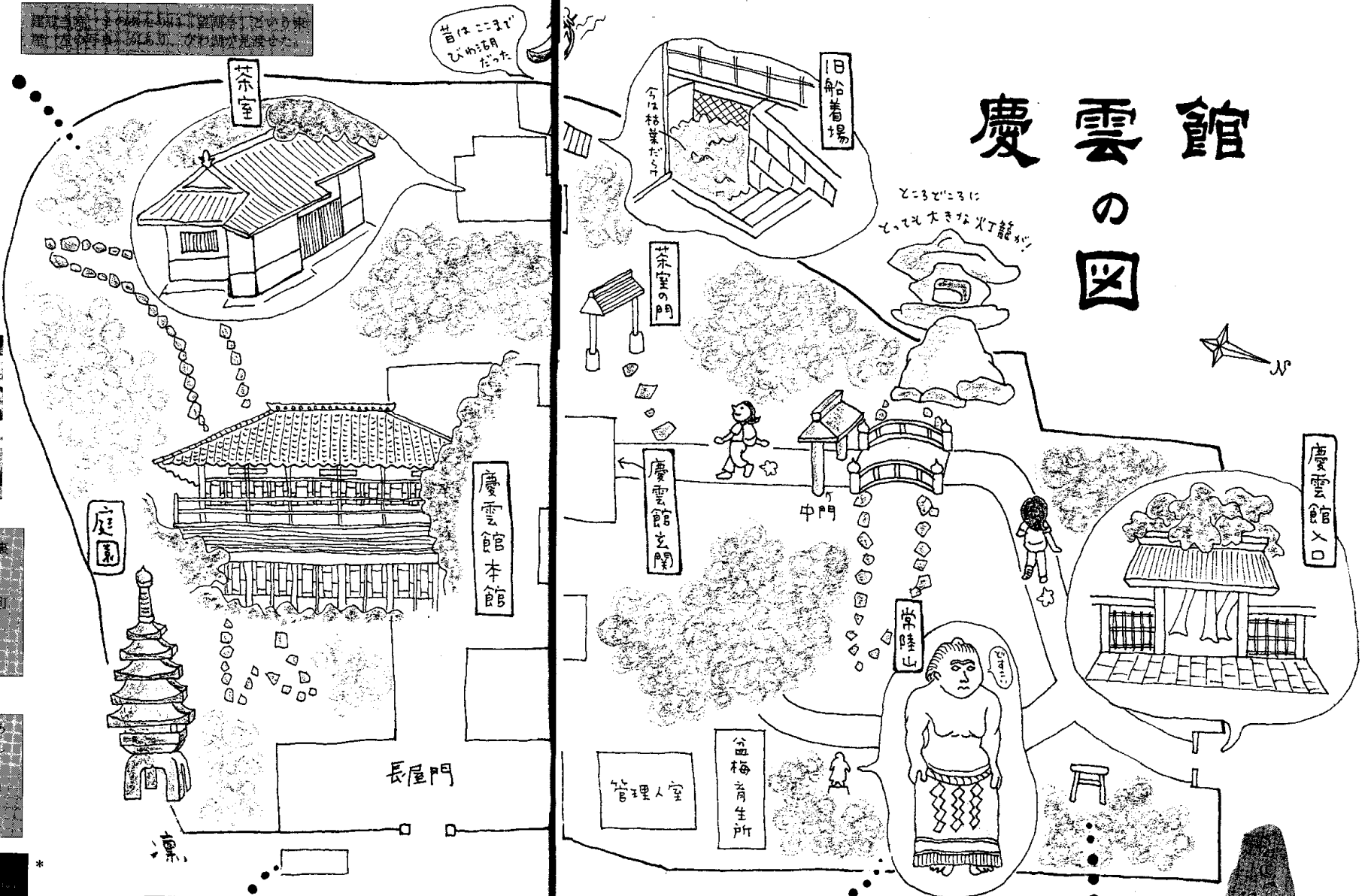


昭和60年の改修工事の際、2階天井裏から見つかった木片には
大塚 谷九次郎次 名古屋木挽町
長濱共同運搬會社 林本屋
浅見又藏旅行 惣兵衛出
とあり、木材の送り状と見られる。

中門を入ったところに大きな平石がある。この石、葛籠尾跡から舟で曳行してきたというが、どうやって……？
ちなみに長さ1丈8尺（5.5m）、幅1丈1尺（3.3m）と文献にはあるが、そんなに大きく見えない。



米川水質自動測定局（県の施設）の建物。慶雲館敷地の南側（←）は米川河口。釣り糸を垂れる人もあるが、あまりきれいな川線ではない。すぐ東（→）には長程琵琶湖線の線路。米川にかかるレンガ造りの鉄橋には何か物語がありそう。



慶雲館の図

常陸山谷右衛門（明治7年・1873〜大正11年・1922）は、水戸市生まれの第16代横綱。17歳で初土俵を踏み、明治37年に横綱昇進。浅見又藏氏の最良力士で、慶雲館にもよく宿泊したという。通算成績150勝15敗、優勝回数7回。マコト家は、浅見氏が町力士のファンでもある。近頃は湖西の石工が彫ったもの。出来はえがよかったため売れず、近くの結着場通りに放棄されていたが、いつの間にか庭内に運び込まれたらしい。平べったくて愛嬌のある顔ついで。

鳥居の奥に小さな祠。以前、祠の後ろには高さ10m以上もある大きな石神像があった。現在、市民会館前に建っている芭蕉の句碑がそれ。「芭蕉にまかばや伊勢の初たより」。昭和40年に建設記念に移された。

